

# 大学運動部における利他主義と支援行動、 部活動満足感との関連

The relationships among Altruism, Assistance and  
Satisfaction in Sports Club in University

阪田 俊輔

# 大学運動部における利他主義と支援行動、 部活動満足感との関連

## The relationships among Altruism, Assistance and Satisfaction in Sports Club in University

阪田 俊輔

### 要約

#### 【目的】

本研究は、運動部活動において必須とされる他者への支援・応援行動に着目し、他者を支援・応援することに対する考え方である利他主義の在り方が、実際の行動と部活動満足感にどう影響するか検討することが目的であった。

#### 【方法】

4年制大学にて運動部活動に従事する大学生331名を対象に、アンケート調査を実施した。調査時期は、2017年5月から8月であった。

#### 【結果と考察】

探索的因子分析の結果、運動部活動における利他主義の在り方について、「共感・利他動機」、「責任の転嫁」、「能力開発志向」、「褒賞・見返りの期待」、「規範の維持」の5因子20項目が抽出され妥当性・信頼性が確認された。また、利他主義のそれぞれの在り方と、実際の支援・応援行動及び部活動満足感との関係について、「共感・利他動機」を起点とし支援・応援行動の実施に至る「利他的プロセス」と「能力開発志向」を起点とし支援・応援行動の実施に至る「利己

的なプロセス」の2つが存在し、特に「利他的なプロセス」を経て部活動満足感の向上に効果を持つことを確認した。

#### 【結論】

これらのことから、運動部活動において部員の部活動満足感を高める手続きとして、1)「他者の立場を考える」機会を積極的に作る、2)自身の利益を志向していても、周囲は支援・応援行動の実施を積極的に評価するという2つが本研究の結果から示される部活動運営への提言としてまとめられる。

#### 初めに

運動部活動において選手中心主義（花輪、1969）は常に存在し、チーム内で代表に選抜されない選手は応援や支援に部活動時間の多くを割くことになる。部活動において応援や支援に時間を割くことは競技活動の時間を減らすことと同義であり、選手としての目標の不達成を招き、ひいてはドロップアウトにつながる懸念も持つ。

一方で運動部活動では、クラブの一員として

クラブを支え、自分たちがスポーツを楽しめる環境を自分たちで創り出すことに大きな意義があるとされる(嶋崎, 2016)。また、運動部活動は選手の「社会力」として定義される、他者と有効な人間関係を築く能力や協同して問題解決にあたる能力、他者の気持ちを慮る能力等の育成の場としても機能を持つことが期待される(門脇, 2010; 作野, 2016)。つまり運動部活動における他者の応援や支援は不可避なものであるが、その行動を通じた教育的な恩恵が得られることも期待できるのである。

他者を慮り、他者の利益を志向し、支援や応援をすることは利他主義(岡部, 2014)、利他行動と呼ばれ(Mussen & Eisenberg-Berg, 1977)、個人の満足感や幸福感に影響するとされる(Seligman, 2002)。利他主義や利他行動は、例えば社会全体の効率性(ソーシャル・キャピタル)を維持するために、他に協調し、利他行動をとるという社会学的定義(稲場, 2009)や、だれかに利することにより、自身にも何らかの利益が得られるという互惠性への期待から利他行動をとるという心理学的定義(富原・大田原, 2003)など、様々な学問分野で定義・検討がなされている。

運動部活動における他者への支援・応援行動が必須であるにも関わらず、利他主義・利他行動の在り方について検討した研究は見受けられない。他者の支援・応援行動が教育的な恩恵の促進効果を持つことへの期待感があり、かつ個人の満足感に影響するという先行研究の知見に鑑みると、運動部活動において、運動部員が他者を応援・支援することについてどのような考えを持っているかを検討することは、青少年育成を機能の一つとする運動部活動への参加の意義を高めることが期待される。

## 本研究の目的

以上のことから本研究では、大学運動部員を調査の対象とし、以下の3つを研究の目的として設定した。

- 1) 利他主義に関連する先行研究のレビューを通し、大学運動部における利他主義の在り方を測定する尺度を作成し、妥当性および信頼性を確認する。
- 2) 大学運動部員の利他主義の在り方、支援・応援行動、部活動満足感の関係性を予測する。
- 3) 1) 2) の結果から、利他主義を鍵概念とした部活動運営への提言を行う。

## 方法

### 対象

中四国・九州地区の4年生大学にて運動部活動に所属する者331名を対象とした(男性251名、女性80名、平均年齢19.6±1.19歳、レギュラー86名、非レギュラー245名、平均競技歴6.92±4.53)。また、従事する種目は、個人種目86名(体操、卓球、テニス、水泳、バドミントン)、集団種目245名(硬式野球、サッカー、ラクロス、ハンドボール、バスケットボール、バレーボール、チアリーディング)であった。

### 調査期間と手続き

2017年5月から8月に質問紙調査を実施した。

### 倫理的配慮

研究代表者が調査の趣旨および測定内容を代表者に説明し、調査協力の承諾が得られた後、調査を実施した。また、調査は強制的ではなく途中辞退できること、中断しても不利益は一切発生しないこと、回答内容のPCへの入力段階にて個人情報特定されないID番号に変換され保存されることを、調査用紙の表紙に明記し、かつ研究代表者が口頭にて説明した。

### 測定項目

- 1) 利他主義のあり方：新たに作成した。

2) 支援・応援行動：河津ほか (2012) より引用したものをを用いた。チームへのコミットメント (チーム全体の為実施される行動)、メンバーへのサポート (問題を抱える個人に向けて行われる行動) の2因子で構成される。

3) 部活動満足感：中須賀 (2016) より引用したものをを用いた。チームメイトへの満足感、活動内容への満足感で構成される。

4) 感情：佐藤・安田 (2001) による多面的感情尺度を用いた。ポジティブ感情、ネガティブ感情で構成される。

## 結果

### 大学運動部における利他主義の在り方を測定する尺度の作成

項目の作成にあたり、本研究では利他主義を「利他行動に至る動機」(小田ほか, 2011)として定義した。その後、利他主義に関わる先行研究より項目の収集し、運動部活動に適用させた草案を作成した。草案の内容は以下の通りであった。

1) 真性の利他主義：チームメイト等の他者の利益のみを志向し、自身に利益が生じてもそれは意図せざる結果だとする在り方 (岡部, 2014)。

2) 利益の期待：チームメイト等の他者の利益を志向するが、その結果として何らかの利益が自身にあることを期待する在り方。利他行動の直接の受け手からの報酬 (直接互惠性) や、第三者からの報酬 (間接互惠性) を期待する (小田ら, 2011)。報酬には有形のもの他に、評判等の無形のものも含まれる (阿形・釘原, 2014 ; Van Vugt & Hardy, 2007)。

3) 規範の維持：他者の利益を志向することで、チームの目的や、集団の機能・規範が維持されることを期待する在り方 (大坪・小西, 2015 ; 中山, 2015)。

4) 他者への共感 「他者の援助要求に気づき、その立場に立って苦しみを共感し相手の幸福を願う」 (Bar-tal et al., 1982) ことを利他行動の動機とする在り方 (富原・大田原, 2003)。

5) 責任の転嫁：支援・応援行動が、精神的に負担が少ないことを期待する在り方 (稲場, 2006)。

作成された草案について、統計的な妥当性・信頼性を確認するため、最尤法、プロマックス回転による因子分析を実施した。また抽出された因子について、信頼性の確認として Cronbach's  $\alpha$  を算出し、基準関連妥当性の確認として支援・応援行動、部活動満足感、部活動内で経験される感情との相関係数を求めた。

因子分析の結果、草案で作成されていた「真性の利他主義」「他者への共感」が「共感・利他動機」として統合された。これは、真性の利他主義とは最終目標として他人の利益になることをする (岡部, 2014) という点、共感から発生する援助行動は、自己の利益を求めない (Bar-tal et al., 1982; 内藤, 1991) という点から、「自身の利益を志向しない」という点で共通し、因子が統合されたと考えられる。また、草案で作成されていた「利益の期待」が「学習志向」と「賞賛・見返りの期待」に分裂した。これは、他者を支援・応援することの利益が、学習という内的な作用で獲得されるか、見返りという外的な作用で獲得されるかという、獲得のプロセスが異なることにより分裂したと考えられる。したがって、大学運動部員の利他主義の在り方は、「共感・利他動機」、「責任の転嫁」、「学習志向」、「褒賞・見返りの期待」、「規範の維持」という5つが存在することが示唆された。また、すべての因子の Cronbach's  $\alpha$  は .66 から .88 の間を示し、.66 を示した「規範の維持」がやや低い値であったものの、おおむね信頼性を確認するに足る値を示した (表1)。

相関係数の結果を見てみると、支援・応援行動には「責任の転嫁」を除く利他主義の在り方が低度から中等度の有意な正の相関を示し、部活動満足感には「責任の転嫁」及び「学習志向」を除く利他主義の在り方が低度から中等度の有

意な正の相関を示した。感情については、ポジティブな感情に対してのみ、「責任の転嫁」及び「学習志向」を除く利他主義の在り方が低度から中等度の有意な正の相関を示していた（表2）。

表1 因子分析および信頼性分析の結果

因子名	項目番号	項目内容	因子負荷量							
			F1	F2	F3	F4	F5			
F1( $\alpha=.80$ )		<b>他者への支援を共感から行い、自己の利益の獲得を目的に含めない</b>								
共感・利他動機	A1	見返りがなくても、誰かの助けになりたいと思う	.70	.04	-.05	-.16	-.00			
	D1	困っている人を見ると、助けたいと思う	.69	-.05	.02	.09	.02			
	A2	自分と直接関係のない誰かでも、成功を収めるのを見るとうれしく思う	.68	-.02	-.06	-.01	.03			
	D2	誰かが喜んでいて、自分も喜ばしく感じる	.62	-.02	.09	-.02	-.02			
	A3	自分と関係の無い人でも、助けることは有意義だと思う	.58	-.19	-.03	.07	.10			
	D3	つらい思いをしている人を見ると、その人のために祈るような気持ちになる	.57	.22	-.01	-.04	-.09			
	D4	頑張っている人を見ると応援したくなる	.43	.22	.09	-.07	.02			
D5	つらい思いをしている人を見ると、自分もつらくなってしまう	.42	-.12	.09	.23	-.03				
F2( $\alpha=.76$ )		<b>他者への支援の中で精神的な負担の軽減を期待する</b>								
責任の転嫁・分散	E1	サポートに従事することで、矢面に立たずに済むと思う	.01	.76	-.08	-.03	-.05			
	E3	サポートは目立たないので気が楽だと思う	.01	.75	-.04	.11	-.05			
	E5	サポートに従事する方が、自分の負担が小さくなると思う	-.07	.60	.04	.01	.00			
	B11	サポートに従事することで、周囲からの非難を受けずにすむと思う	-.07	.48	.11	.03	.22			
F3( $\alpha=.80$ )		<b>他者への支援の中で自己の能力の開発・向上を期待する</b>								
能力開発志向	B5	サポートに従事することで、自分の長所を見出したいと思う	-.06	-.02	.86	-.01	.05			
	B6	サポートに従事することで、様々なことが学びたい	.13	-.01	.73	-.03	-.01			
	B7	サポートに従事することで、自分の技能をさらに深めたい	.03	.03	.67	.02	-.08			
F4( $\alpha=.88$ )		<b>他者への支援を通し、非支援者や支援者からの賞賛・見返りを期待する</b>								
褒賞・見返りの期待	B9	サポートに従事することで、集団や集団内の人から見返りがあればいいと思う	.02	.05	-.02	.88	-.01			
	B10	サポートに従事することで、誰かから見返りがあればいいと思う	-.02	.05	-.00	.85	.00			
F5( $\alpha=.66$ )		<b>所属集団の規範の維持目的達成のため他者への支援を実施する</b>								
規範の維持	C2	利己的に行動することは集団のルールに反すると思う	-.05	-.08	-.03	-.02	.66			
	C3	集団内で利己的に振るまう人を見ると、憤りを感じる	.15	.02	-.08	.01	.63			
	C5	集団のために利己的な行動は控えなければならないと思う	-.03	.13	.09	.00	.58			
			共通性	4.9	3.2	1.5	1.3	1.2		

表2 各変数間の相関

尺度	因子名	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
利他主義の在り方	1 共感・利他動機	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	.37 ***	.46 ***	.52 ***	.47 ***	.39 ***	<i>n.s.</i>	.37 ***	.26 ***
	2 責任の転嫁・分散		.46 ***	.18 ***	.28 ***	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
	3 能力開発志向			<i>n.s.</i>	.27 ***	.12 *	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
	4 褒賞・見返りの期待				.28 ***	.24 ***	.23 ***	.15 ***	<i>n.s.</i>	.21 ***	.18 ***
	5 規範の維持					.14 *	.34 ***	.23 ***	<i>n.s.</i>	.21 ***	.22 ***
支援・応援行動	6 チームへのコミットメント						.52 ***	.48 ***	<i>n.s.</i>	.33 ***	.29 ***
	7 メンバーへのサポート							.44 ***	<i>n.s.</i>	.39 ***	.36 ***
感情	8 ポジティブな感情								.14 *	.52 ***	.30 ***
	9 ネガティブな感情									<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>
部活動満足感	10 チームメイトへの満足										.49 ***
	11 活動内容への満足										

†  $n=331$ , †† \*\*\*  $p < .001$ , \*  $p < .05$ , *n.s.* not significant

大学運動部員の利他主義の在り方、支援・応援行動、部活動満足感の関係性

因子分析の結果より、大学運動部員の利他主義の在り方は5因子20項目が抽出され、妥当性・信頼性についても、おおむね確認できたといえる。しかし支援・応援行動との相関関係をみると値は一定ではなく、利他主義の在り方が実際の行動に与える影響は因子ごとに異なることが予測される。高木（1985）によれば、他者への支援・応援行動には発生機序があり、本研究で示される複数の利他主義の在り方についても、すべてが横並びに支援・応援行動に影響するの

ではなく、何らかのプロセスが存在する可能性がある。したがって、高木（1985）の向社会的行動（他者への支援・応援の別称）の発生機序（図1）及び相関係数の結果より仮説モデルを設定し、利他主義の在り方と支援・応援行動、満足感の関係性を推定した。

仮説モデルについてパス解析を実施した結果、モデルの適合度指標は、GFI=.97, AGFI=.93, CFI=.96, RMSEA=.065と十分に基準を満たす値を示していた（図2）。各変数間の関係では、支援・応援行動に有意に影響を及ぼしていたのは共感・利他動機（ $\beta=.41, p<.001$ ）、ポジティブ

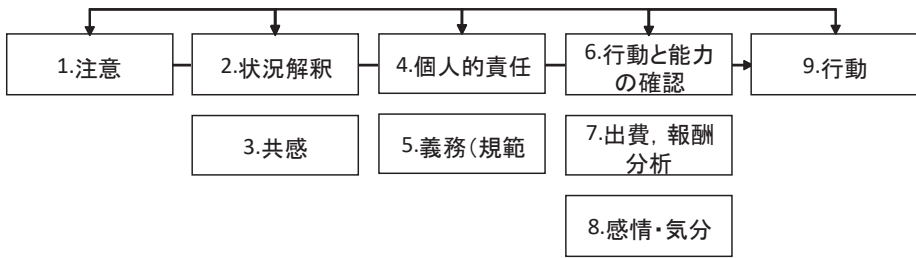


図1 支援・応援行動の発生機序（高木，1985）

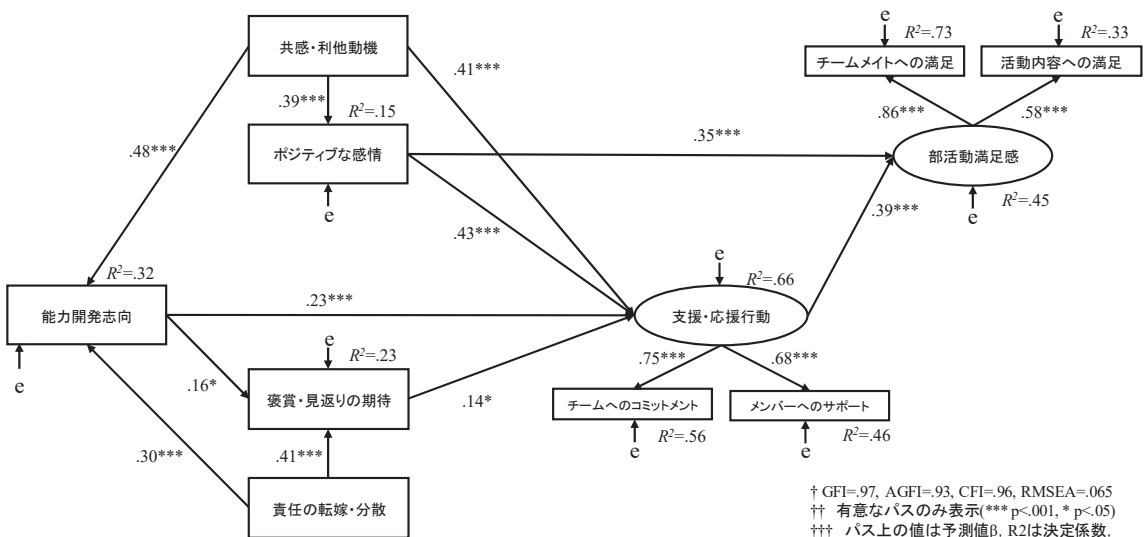


図2 利他主義の在り方、支援・応援行動、部活動満足感の関係

† GFI=.97, AGFI=.93, CFI=.96, RMSEA=.065  
 †† 有意なパスのみ表示(\*\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$ )  
 ††† パス上の値は予測値 $\beta$ , R2は決定係数,  
 eは誤差を示す

な感情 ( $\beta=.43, p<.001$ ), 能力開発志向 ( $\beta=.23, p<.001$ ), 褒賞・見返りの期待 ( $\beta=.14, p<.05$ ) であった。従属変数をどの程度予測できるかを示す決定係数は、 $R^2=.66$ と比較的高い値を示していた。ポジティブな感情に影響を与えていたのは共感・利他動機 ( $\beta=.39, p<.001$ ) のみであり、決定係数は  $R^2=.15$ で低度の値を示していた。褒賞・見返りの期待に影響を与えていたのは責任の転嫁・分散 ( $\beta=.41, p<.001$ ) 及び能力開発志向 ( $\beta=.16, p<.05$ ) であり決定係数は  $R^2=.23$ で低度の値を示していた。また、能力開発志向には共感 ( $\beta=.48, p<.001$ ) 及び責任の分散・転嫁 ( $\beta=.30, p<.001$ ) が有意に影響し、決定係数は  $R^2=.32$ で中程度の値を示していた。また、規範の維持についてはどの変数との関係性も示されなかった。

パス解析により得られた結果について、部活動内の応援・支援行動に至るプロセスは、「共感・利他動機→ポジティブな感情→支援・応援行動」という共感を起点とするプロセスと「責任の転嫁・分散及び能力開発志向→褒賞・見返りの期待→支援・応援行動」という能力開発志向を起点とするプロセスの2つがあると解釈できる。まず、共感・利他動機を起点とするプロセスについて、共感は、困っている人や努力している人を助けたいと考え、利他動機は自己の利益を志向しないという動機にあたる。応援・支援行動に至る変数として最も強く影響しており、またポジティブ感情を媒介する影響も示している。この結果は従来の向社会的行動を主題とする研究の結果（例えば高木, 1985や菊池, 1988）と同様のものを示している。つまり運動部活動における共感を起点とするプロセスは、「自己の利益を求めず、困難や苦勞を感じているチームメイトを助けようとする」という、利他的プロセスであるといえる。

次に責任の転嫁・分散及び能力開発志向を起

点とするプロセスについて、能力開発志向は、他者を助けることを通して自己の技術向上を志向するという動機にあたる。この能力開発志向は共感と責任の分散・転嫁の2つの変数の影響を受けている。共感とは他者に共感すると同時に支援する責任があると考えられる側面を持ち、責任の転嫁・分散は自己に責任が集中することを避ける側面を持つ（菊池, 2014）。そしてそれらの変数が周囲の自身への評価を高めることを期待するという、褒賞・見返りの期待を媒介し、支援・応援行動に影響を及ぼしている。これは自身の能力の向上、周囲の評価の向上、責任を回避することによる恥の回避という、自尊心の維持・向上を目指したものであると考えられる。つまり能力開発志向を起点とするプロセスは、「自尊心の向上を目指し、チームメイトを助けようとするプロセス」であり、利己的プロセスであるといえる。

最後に、部活動満足感との関係について、運動部活動における利他主義の在り方は、すべての因子は満足感に直接的な有意な影響を及ぼしておらず、利他主義の在り方とは別の要因で、かつ支援・応援に効果を持つとされる（高木, 1985）ポジティブな感情のみが部活動満足感に直接的な有意な影響を及ぼしていた ( $\beta=.35, p<.001$ )。つまり、利他主義の在り方は、実際の支援・応援行動を媒介してのみ部活動満足感に影響を与えており ( $\beta=.39, p<.001$ )、決定係数も  $R^2=.45$ と比較的高い値を示していた。

以上のことから、大学運動部活動における利他主義の在り方と実際の支援・応援行動の関係性は、他者を慮る「利他的」なプロセスと、自身の自尊心のための「利己的」なプロセスが存在することが確認された。また、「利他的」なプロセスの方が実際の支援・応援行動を媒介して満足感をより高めることが予測されるが、「利己的」なプロセスも、ある程度の満足感の向上

に寄与できると考えられる。

## まとめ

### 本研究のまとめ

本研究は、運動部活動において必須とされる他者への支援・応援行動に着目し、他者を支援・応援することに対する考え方である利他主義の在り方が、実際の行動と部活動満足感にどう影響するか検討することが目的であった。本研究の第一の成果として、運動部活動における利他主義の在り方について、「共感・利他動機」、「責任の転嫁」、「能力開発志向」、「褒賞・見返りの期待」、「規範の維持」の5因子20項目を抽出した。第二の成果として、利他主義の在り方と、実際の支援・応援行動及び部活動満足感との関係について、「共感・利他動機」を起点とし支援・応援行動の実施に至る「利他的プロセス」と「能力開発志向」を起点とし支援・応援行動の実施に至る「利己的なプロセス」の2つが存在し、特に「利他的なプロセス」を経て部活動満足感の向上に効果を持つことを確認した。

本研究の成果は、運動部活動において支援・応援行動という競技以外の活動にも大きな価値を見出した点で、部活動を通じた青少年育成や、スポーツの普及に貢献できるものであるといえる。ただし課題として、「規範の維持」がどちらのプロセスにも関係せず、支援・応援行動にも関係しなかったという分析上の課題、運動部活動における利他主義の在り方を測定する尺度の作成において、一度のみの調査でしか妥当性・信頼性を確認していないという手続き上の課題が存在する。どちらの課題においても調査及び分析の蓄積が必要であり、本研究で示される知見は、今後の運動部活動の支援・応援行動を考える基礎として扱われることが期待される。

### 部活動運営への提言

本研究の結果から、部員の「共感・利他動機」を高めることが、支援・応援行動の質、ひいては部活動満足感を向上させられる手段の一つであるといえる。これは、大学運動部とは異なる対象で行われた先行研究でも同様の知見が示され（菊池, 2014）、それらの知見も参考に、部活動運営についての提言を行う。他者への共感とは、単に他者の痛みや苦しみを同じように感じるのではなく、自分がその他者と同じ立場にあるとどうなるかを考える「役割取得」が含まれる（菊池, 2014）。つまり共感とは「相手の立場を考える」能力であり、運動部活動では他者への支援・応援を「決められた役割」として行うのみでなく、援助を必要とする者を探し、その人が必要とする援助を探索することが重要になる。また、共感とは、喜びや楽しさに対しても発生する（菊池, 2014）。部活動のメンバー同士で、ポジティブな感情を共有できる機会を作ることも、共感を起点とする部活動満足感の向上に寄与できると考えられる。同時に、支援・応援行動の過程において自身の利益を追求することも否定すべきことではなく、周囲が支援・応援行動の実施を積極的に評価することが満足感の向上に寄与できる。したがって、運動部活動において部員の部活動満足感を高める手続きとして、1)「他者の立場を考える」機会を積極的に作る、2)自身の利益を志向していても、周囲は支援・応援行動の実施を積極的に評価するという2つが本研究の結果から示される部活動運営への提言としてまとめられる。

### 参考文献

- 阿形亜子・釘原直樹 (2014) 向社会的行動における競争的利他主義の検討。実験社会心理学研究, 53(2): 108-115.
- Bar-tal, D., Sharabany, R., & Raviv, A. (1982)



- Cognitive basis of the development of altruistic behavior. In Derlega, V. J. & Grzelak, J. (Eds) Cooperation and helping behavior: Theories and research. Academic Press, pp.377-396.
- 花輪民夫 (1969) 高校における校内競技会, 新体育, 39(7): 57-63.
- 稲場圭信 (2009) 第5回公開セミナー「思いやり格差」社会からの脱却—利他主義の可能性と支え合いのかたち. セミナー年報, 135-143.
- 稲場圭信 (2006) 「思いやりの行動と社会的責任:個人・対人関係・社会の視点から考える」. 神戸大学発達科学部研究紀要, 13(3): 35-38.
- 門脇厚司 (2010) 社会力を育てる:新しい「学び」の構想. 岩波書店.
- 河津慶太・杉山佳生・中須賀巧 (2012) スポーツチームにおける組織市民行動, チームメンタルモデルとパフォーマンスの関係の検討—大学生球技スポーツ競技者を対象として—. スポーツパフォーマンス研究, 4: 117-134.
- 菊池章夫 (2014) さらに／思いやりを科学する—一向社会的行動と社会的スキル—, 川島書店.
- Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. (1977) Roots of caring, sharing, and helping: The development of pro-social behavior in children. WH Freeman.
- 内藤俊史 (1991) 第3章道徳的行動の発達, 大西文行(編) 新・児童心理学講座9 道徳性と規範意識の発達. 金子書房: pp.95-137.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2016) 運動継続のための大学運動部活動における動機づけ雰囲気, 自己開示, 満足感の関係. スポーツパフォーマンス研究, 8: 1-13.
- 中山康雄 (2015) 利他主義と共生に関する哲学的分析. 未来共生学, 2: 49-62.
- 小田亮・山内新作・永縄拓也・平石界・松本晶子 (2011) 利他性の進化認知科学的研究のための尺度の検討. 観光科学, 3: 23-33.
- 岡部光明 (2014) Do for Others (他者への貢献): 黄金律および利他主義の系譜と精神構造について. 明治学院大学国際学研究, 46: 19-49.
- 大坪庸介・小西直喜 (2015) 強い互惠性と集団規範の維持. 感情心理学研究, 22(3): 141-146.
- 作野誠一 (2016) 地域を育む運動部活動のあり方, 友添秀則(編著) 運動部活動の理論と実践. 大修館書店: pp.34-46.
- 佐藤徳・安田朝子 (2001) 日本語版 PANAS の作成. 性格心理学研究, 9(2): 138-139.
- Seligman, M. E. (2002) Authentic happiness: Using the new positive psychology to realize your potential for lasting fulfillment. Simon and Schuster, New York.
- 嶋崎雅規 (2016) 教員に求められる運動部活動の知識とスキル, 友添秀則(編著) 運動部活動の理論と実践. 大修館書店: pp.208-220.
- 高木修 (1985) 冷淡な傍観者と温かい援助者を分けるもの. 教育と医学, 33(3): pp.289-294.
- 富原一哉・大田原久美子 (2003) 利他行動の発現に及ぼす共感性, 互惠性, 直接的報酬の効果. 人文学科論集, 57: 1-15.
- Van Vugt, M., Roberts, G., & Hardy, C. (2007) Competitive altruism: Development of reputation-based cooperation in groups. Handbook of evolutionary psychology: pp.531-540.

この研究は2017年度笹川スポーツ研究助成を受けて実施され, 本稿は完了報告書を加筆したものです.